





加賀染

春部

元日

荒れ徳がうに思ひし國の春
城のやま色もきそ笑ひの春
万々あふふの春
報喜にあふふの春

一烟

来哉去月はゆきも將軍塚
城の井ハ露れゆきも江戸
江戸の春何富士もたれ石
若河や春てそ住む多の江戸
好は露り上りまんとそ思ふ君の春
飴り蓬萊既住勢海老の山
山より有なし只世に春の春
宵の春や寝るやと頭中の春

貞之 枯竹 可之 正之 雨舟 一笑 頼元 野水

君や野中てある民のま
み廻りうもつあつて我也春
凡諸金目通也奏者のま
君の危石や文殿武殿仕のま
谷戸や門番する黄を告るま
虎の方や子五の洞所殿の春
曉降や海をかりては前山
み廻りうもつあつて我也春

寂 任 惠 因 波 明 玉 扇
保 老 是 之 之 之 之 之

物祝言あつての松宮女也
唐津のま今別告るま利筆物
筆物して源氏を書くま山也
決は津具大橋流也筆物
かき物也棒一文字礼者のま
見おやまの厨樂うは首をの
上包三文巻川や難者ま
飴り海老まこのまのま赤胡参

貞之 捨木 任志 貞之 貞之 可海 詠止 同

炎照
 卜英
 未知
 不智者
 枯竹
 一舟
 友玄
 古曆

我醉可憐花袖圖之一意宋昌勝家小較

裾の松紋は八面玉蓬草也
海老の向う金衣簪千重花也

一琴
一平

氷模

尺善の餘慶何寸氷模
赤井なれや常盤う卑下氷模

薰
一平

熱想文

子想文や下紐の雲相違なく
後は戀の重荷包や熱想文

一烟
道次

袴のあうては袴もききき
袴もきききききききききき

繫
一足

胡鬼板

袴の尻布をこの胡鬼板羽
袴の尻布をこの胡鬼板羽

因元
已来
由少

水汲

男の中やき浦の堤水いふ

一烟

聲は必や定数傳てこそ枕
聲入や居士もいふ心法あり
必は火のちるゝの聲祝
是
言
之

初芝居

札有き利名といふ
あゆみえんかのしる所初芝居
此川原通念れさゝや初芝居
山本や口も立ち門初芝居
是
同
同
之
聲

飛虎取初芝居

光は組山本も有り初芝居
たもとせむすの勘之初芝居
鬼のまたや隠るもかき初芝居
あふあひてはる有き初芝居
好聲の歌中やゆるる初芝居
花よりいり子之守初芝居
子目
是
衆
不
意
計
明
郷
小
枝

りやる百万人かれ親の私
因之

石臼のまじ十年の松のまじ

一毫

徳別七尾を

常のまじや子日れま百

難

一史

今日まじ日押まの松の前途は

一平

若菜

紙袋のまじやひきて

一塵

天子等まじ取る都の初若菜

一風

白馬

白馬何處かまじる年もまじ

古を

長今まじま風をまじて白馬

雨夕

帳初

場帳まじま藤咲門の口

正之

今及まじま書也帳初

一舟

高穴乃の記也まじ

可得

場帳はまじま書也

一息

疏歌

わそ殿のきくらゝの疏歌ふ
わそ殿のきくらゝの疏歌ふ

正之
一舟

左義長

たが長火角の殿のきくらゝの

安之

具足餅

具足餅や火のきくらゝの疏歌
具足餅や火のきくらゝの疏歌

任志
同之

具足餅や火のきくらゝの疏歌
具足餅や火のきくらゝの疏歌

松紫
周元
臭之

霞

越の海や中名 硯夕霞
杓線香山をゆきし利為霞
盲目也竹の下道 八重霞
まふ霞のきくらゝの疏歌

夕霞
一毫
同
飛水

响れ山响くへは語り夕霞 一毛

一向宗道書

相好金山前八座川霞哉 正義
唐墨やつき目の神の爲霞 一意
破風口で書と告り 卯霞 野中

号

宋之吉長文字よ字く是をたれ 赤翁
号れ白身と名きり 逢坂の 松紫

号たり 乍^{アルキハ}近ク乍書ク 因之

日蓮宗の寺ぞ

号を雪よつめりる祖の那 那水
子やうくむけ後句ある久梅 一平

梅

鼻柱杖两用や園の梅 園之
此を寝て後家より一賓梅 夕園

あつとと六千圖也梅曆
ゆふさむ青はる梅の千句也
梅の君也上る利末の病

貯水
臭之
臭之

御忌

はるや青也ーさつは鏡の歌
うけつや大作のは初意の酒
法然居さるゝあゝ我ーさる

臭之
嘯風
風之

春水

はるや水也ーさる茶研の谷

桔竹

初灸

た右や中は十六初灸
二日灸もきやうとふまじ
まゝ初やまはれぬさる灸
初灸節打廻ー屏風を立
しつゝしは按摩はじむ初灸

臭之
一之
波之
養老
笑山

出替

物替やして頃は三月下人
お替やれしものさる者も今季
物替やあつたものさる者も
お替やれしものさる者も今季
お替やれしものさる者も今季
お替やれしものさる者も今季
お替やれしものさる者も今季
お替やれしものさる者も今季

嘯 蕎 一舟 一素 一素 正之

鎌倉箱の底も出替也

猫妻戀

張要りまの反古や猫の妻
猫の妻や極楽の事といふ
食入や南の草猫の戀
猫の妻やなるといふ
書置き色あつたものさる
や書置き色あつたものさる

任也 函也 古曆 可得 惠也 一平

新独

あゝの独や時一も二月上の藝
少所やむろふ本ハ新の独

一舟
勢舟

秋真

秋真や礼儀あつく先生の

嘯

涅槃舎

佛才子や神の以末あふ河川
別るや名あそく三ハ秋也様

一舟
因之

兎も毛一切前生涅槃の繪

沈之

あま涅槃絵像もくよくハ秋也

雨扇

涅槃絵や管城の兎楮は羊

一平

春雨

夏も雨もさ萌きり春代雨

鼻之

年雨もさひのりすくハ春の雨

一烟

柳

柳上よりさる心也新清水

任志

ふる雨をうが打也柳陰
生若也極の柳は夢れ足
楊柳はもろ知の力や十^テ一面^{タス}
柳は有り号とむる力痛

花

お花極はちんちんちんちん
谷地や斗柄ゆまて遠の花
下戸元さきや花れろるる

更さとうじ番太や花は小枝嵐
酒事や誰勝もて半花
あゝさの精もよあせ居れつ
あゝもある海む花のふりや毒所
就其もや死のゆひる言の障
あゝもや柳は奈年面金銀を
通ひ花は酒のちるる花枝
あゝもやう花は又日をわけるる

可染 言量 一平

一烟 紫 臭

国 正 松 元 枯 臭 国

次歴たにふ酒に小頭巾 哉
かし酒や酒中花落ちて 吉野の影
吉野の花多き粉つく 是や我心
吉野の花年より長き 是を世に
茶室や貝かきよめる 花の浪
銀玉もの浪の海月也
節もや宿まあてり 是を花
盆にや酔覚ちし 花に酒

吟 染 一 烟 可 得 幽 同 閑 枕 穩

花の錦さつさ 三味線も花折れ
花より花やひるもさつさ 花
花の花や茶室の煙多 都山
花の花や吉野のまては 酒乃人
ゆくへの口吉野も有き 花に下
目ありやまてり 花の影
晴るる 一百里ふさ 花に下
花の道より花を 火種茶

寝 是 茶 一 烟 家 観 正 是 如 托

今もや胸は有るをたの山
小者笛を吹酒をうしむる山
お茶屋もやむる宿のりき
お茶屋もやむる自れもはる
お茶屋もやむる自れもはる
お茶屋もやむる自れもはる
お茶屋もやむる自れもはる
お茶屋もやむる自れもはる
お茶屋もやむる自れもはる
お茶屋もやむる自れもはる

可憐 一表 上英 表順 元昌 善之 矢山 貞之

在京れ比

お茶の酒代かまなり都れ花
清かきしる量とは昔の花
八雲立是る花のりき
お茶の酒代かまなり都れ花
清かきしる量とは昔の花
八雲立是る花のりき
お茶の酒代かまなり都れ花
清かきしる量とは昔の花
八雲立是る花のりき
お茶の酒代かまなり都れ花
清かきしる量とは昔の花
八雲立是る花のりき

加么 一表 宗祝 枯竹 清芳 座笑 柳梢

臭之 有聲 波近 雨身 南也 疾 乾元 一乎

同

一烟之

世界の幕籠の雲や江戸橋
寺橋や江戸の橋よ大上戸
江戸橋すくはる功德ある上戸
江戸橋ちとあむはるも江戸橋
いも江戸橋あむはる江戸橋
江戸橋あむはる江戸橋
江戸の橋も江戸の山吹も江戸

一志 夕笛 加殿 可海 国之 一畑 赤義

櫻鯛

櫻鯛も江戸のうき江戸
江戸根に穴をたけー櫻鯛
江戸のうき江戸のうき江戸

成書 一表 同

吉田

江戸の思や牛江戸の思や先
江戸の思や牛江戸の思や先
江戸の思や牛江戸の思や先

可得 粹

三月五日 江戸

即良雛やまき水多き節分
来也中たりるる珍穂菜は
賣しむやんをわねに根菜を

負之
莖烟
任志

任志

せや塩丁の味は箱の中筒男
全翅多羽多しやと塩丁のまふ
声多しきとて田舎を去る沙汰余
まじちうを塩丁は玉や鼻の陰

藝之
負之
可静
一烟

町は幕引ハうーりや境浦
桃林よの字つちを利本万の陰

春多

由之
因之

解さーるぶうを鳴る雀也
燕の巢まぬは去る入るま利

歸房

上英
湖舟

櫛の櫛封——文やろ歸房
花を忍ぶくくの韻字也海房

可勢
春歌

蛸房ハ文々やえねと云ふ

一斗

雉子

雉子ハ羽虫うちなカ造ハ云也
わるなりてどの目う赤い知れ也
知子時曾ハ狩人ハ是れ也云

波之
真之
因之

蝶

多具の蝶りりて云云云
夏う〜りかうふ花の如蝶

友琴
直治

蛙

あま蛙山吹修り乃使リ也
糊賣や舌多通して鳴蛙
軍兵蛙や池のく〜これ
皆よくがむ〜

一表
因之
吉重
一平

去草

九穢草ハ思ひそめる茶湯全
摘て煮や煮う〜云とく

可松
友次

かの太子あゝあなるも初歎
綾母や角らと初る岩のうゝい

玉巻
一平

春月

尻の冷皆をこまき利勝月
昼もくゝ細差をさそ月
かしこい細のまの夜の日懐中芳

電
身之
洛木

礮燭

おもしろく念佛のうゝ山

任志

藤

松のむ海夜房かゝるもよま
貴族也切常屋う目より夜は
まゝのれ夜も庄司う姫也
うき葉よす海嵐やよめる夜浪
代垢部や藤の白浪官の影

一烟
枕邊
一得
玄負
詠止

勢中そ

勢のわさし人そ流る夜浪

任志

さしづむハあらねねハ花也利
白友や道中ハ花也人長物ハ松
野良ハ花也ハ水也ハ花也

枯竹
明次
松

山吹

當座の花山吹ハ利千之丞
款冬ハ花也や誰ハ泪ハ
肌ハ花也井ハ花也下等ハ款冬ハ
山吹ハ花也花ハ花也

花
息
同
同

山吹や波もさかろる底小判

一烟

苔

夢也や經の細苔ハ花也
花ハ花也花ハ花也

蕭
一平

壬生念仏

壬生念仏地蔵ハ花也

因之

雜音

かろる家ハ花也

一波

蝕蝕やふききしりき泉石
故きや書のきりて也江新
きの日や中岡坊も五六番
葛粉とよ又遠根の泥也きり
核の板よききききききき
きききの板も南きききき蛇

可清 加心 為都 一素 同 一波

ききき

千金や打ちききききき既
千金のききききき有ききき

一烟 一平

初更

奥少生昨夢より移りて夜
今日そ給我よりハニきんかめ
部教さるる所化の懐 更衣
と月夜衣なりと云ふ定紋有
下女たすきやうひんやう其
分ちよたむき

因之 一素 一補 一舟 不出

太鼓候子かろー衣裳や更衣
四月^{ツキ}やあつあまの更衣

牡丹

一平 一足

玉兔片ー猫登睡る牡丹地
富貴也牡丹の外は境前
女院はのりよ少座花の玉

一烟 一足 昌芳

杜若

うすの時や涙くもの息よ花

さき

一
寒

幕上糊又ちるちる紙花水

一
表

例のふゝ盛をふゝ疎花哉

壬也

新樹

山勢連枝也青門

貞之

山北の里にありしや

一

桐花

方餐山每食花候桐之芳

吾

卯祀

胡粉硯印如浪立不乾利

國

岩手卯辰月とてふも海に

身

灌佛

灌仏もむくハ我前一指銘

禁

いしう是乳のむや僧向仏を考

嘯凡

愛染明王蓮のうん仏等

一素

新茶

新茶の山壺をたて岩峯の
生熟也祖母の愛ふ新茶賣
赤林寺新茶や告て夜茶の陸
ちひみそ眠をさるや壺の古茶

夏之 國之 古之

其書

右百目八黄門定家流衣書也

夏之

郭么

一声やる賣れお食郭么
枕の町埋まぬしやきり
多分やう千人の口蜀れ魂
古茶一枚一部の秘事う郭么
少時より賣れぬの万郭么
あつる月と郭のう郭么

一烟 枯竹 友琴 正之 為 繁

ちり枕ききれつへ郭么
月平砂を鳴や霜長の郭么
八葉り枕より急有り郭么
足跡の音演櫓つ——郭么
松 同丸どまりほろ寄ん
月よせの瓶向をひせ郭么
まう枕函新よさうて郭么
又六う門をせよ郭么

常云 枕端 洛末 可勢 波之 未及 国定 主后

鎌倉

村雨や長谷の水 ほとけま
るなりやる規は虚空よりと
月よりと鳴りつきたり郭么
若双六並好り耳に郭么
待草臥よりや町わりの景を
月記や村雨はあまを郭么
月未鳥と市つるを郭么

慶山 波之 冊あり 露庭 任志 任也 一意

大坂まで

此城のお留守番うほらきり
宵きうてと雲路むせの郭
郭云妄執の爰ふ耳の底
雨おきやういりふ今る親
一二の校いさふゆへ郭
郭云なうて、ちやう起れた
電くはあきそをくれ郭

うき
白象
一舟
堂之
貞之
一之
可得

證據あり柳よと云郭
柳ゆえさういふ一つ郭
あるまう鬼の会佛郭
あまごう親友内裏計そ郭
須戸の爰もくや月う郭
郭云侍も平あまや曉の
とけい僕う時也時のる
耳計万石とるや郭

一毫
一之
一烟
因之
可分
吉次
栢行
丹靜

色や二目志ハるゝの郭云

怒心

一向宗通場云

筆ハ林うゝ判のそめなうる
山のり耳とある郭云
夕虹や璃うけて侍郭云
郭云もゝ父が名残云
草の店とよれハそち郭云

古曆
落葉
一汲
因之

諫鼓鳥

かろの僧都とむく諫鼓鳥
家ハ後家う思ハれ山有カ
常候やこる所と云や侍鼓多
す御や只日拍子と云こ
よるの雨と付古ーカこ

一葉
同
一葉
一烟

初興

つゝあるちあ猛急初興

因之

祭

祭客民の如くハミヅク也
天満祭のそハ排灯の今も
流外 臭之

麦秋

石見や麦のこりハ清香山
多岐やつく男もす女も
小座敷や菊の花咲き
麦の果や木情の里よりハあき
秋 任也 歎生

かゆき出さや坊主も先少
初吟

弟竹

約瓶のや葉平竹子つ井筒
善化和尚さき忍びん今年生
わすれぬ新箱舟一箱竹子
竹のそや新は空をちり
打ちて其後二玉竹のそ也
名竹や煙のそ人も多紫粉入
臭之 古層 夕函 臭之 長之 臭之

つる首七災の新宅の寄しめ 憲

螢

いりふ小指かひも 飛螢 為事
沢の螢式部うこれて流るる 幸政
こも戸や螢なく 螢 固炭 山枝
茶年あや水とあこら 螢 貞之
晴直や古 為らるて 可然
檜の下に 誘負は 由欽

見其金や床張られて 飛螢 燈可
されハ車能字つり行有 波之
持合もろ所れ 一筆

蚊 蚤 蠅

素とりふ人蚊を止むおれ初と也 味以
蚊のまじりや烟の末重 枳竹
やと今ね 任志
△^{ハナ} や山ありーれ 直世

磨きく要やうのて梅振虫

古磨

音梅

あうとも有けふ梅法師

一波

紅粉花

源流や二目具の襦美子霧花

一平

蓼

本作の地流洗へて蓼酢れ波

貞之

五月雨

天の浮橋水きく成へて五月雨

紫

笠縫むう行や栲ひて五月雨

貞

磨きくく貝也五月雨

善之

式甚多の横らり淋五月雨

未希

いゝ番屋茶履よき五月雨

因之

核りものも拭帯五月雨

勢

五月雨や宿の敷浪を帯

子重

五月雨や菖蒲の花より日さし

枯竹

ふをさるゝの神の漆より月雨
氣をを空につくひづくつゝ

粹
元

田植

水滂ふもじや五月早苗之助
を自ら及まうゝて田植水

是
我

大矢教

晴るぬの目を見り矢教大篇
篇——此の登大矢教

正之
臭之

五節

決は源氏江戸甲有八幡座
少人時新あゝむ也甲人秋
安甲紙屑買ふつゝ

臭之
因之
同

雨降きる自

流はるれもの取高や安甲
今白計とそゝ繼つゝ
葛蒲太力今も五月の園打

波之
一舟
携

二あものちひて五條の内裏粽也 臭之

夏月

うしや川岩はぬき夏月 松紫
ふきりふし女の姿夜月 可得
日傭う松窓なるま利夏月 未及

水鷗

すき夢や小沢の水鷗よ夜かせこ 同之
うさこの牧下まねむき水鷗 同

五あひて水鷗也き利塔の波 臭之

蟬

かき虫山蛸めきよし蛸一ハ 五友

蛸言よ

多ぬやふけけ夏月蟬 松紫
今き夜山首月其物き蟬の経 乃郷

蛸桑

赤焼のききき梅印うき蛸 言き

朽通よと負を乙き紙な湯
供中の康やまゝるちほの鮎葉
華杭は水のまゝる入れとち也

一毫
同之
繫

氷室

用心士の壁凍——氷室守
袋凍やまゝる壺にて氷室の谷

一毫
負之

軍法

軍行やちの煙れ鴉より

末昌

軍の山かられなきは六法也

可得

一夜酒

白山宿坊あり

まけの邦かの碧巖も一夜酒
熱の色は是も人々よ麻地酒

梅好
嘯凡

浅野川鮎呼

いそるう鮎より乙浅野川
浅野川やちほのちるもよ山鮎

勝延
宴之

海野川や鮎よみの海老の腰
鮎もよみ海老といふは此川也
石よさうのてほくぬきも呼鮎之
海老のよむもそれハ浦之海老也
る前もや抄およ入海野の鮎
つきもて友よ鮎や海野川
よみ鮎のうけえさる海野川
あゝうか均棹はは海野の鮎

正好 国々 松紫 枯竹 寶 湖丹 一季 笑山

夕立

夕立やまこもの灰代疑切丸
白雨やぬれ草履の道とちり

可海 一舟

汗暑

汗の汗はましくとてきんき
そま汗をもくさるやま漆
あつこ見や又玉ここの大汗水
他国やあつこを様の中ぬ夏

等子 枯竹 国心 郭也

抱影

抱影ハきまりの花心也

慶山

善徳寺此

汗くく抱影もか作事本

毫

納涼

狭し敷や野上れ宿の夕涼
あし申琴の音もか夏庭敷
涼座やあしあしやと茶座

圖之
長好
幽也

夕涼たきとむるは流川
夜涼や久々の岩松長床机
水もとるに砂粒也涼之床

可得
夜琴
勝長

扇

焼杉や横雲さきふ扇箱
あゝ笑止や風う留め扇
品玉もさきくわす扇水
一包夕顔もくわす也

貯水
因元
善亦
貞之

てんがう書戸羽はめて窓は欽素

一平

祇園寺

祇園寺そと座や山田の村所
都ねるひきまお祭にわたり

一烟
湖舟

連

友と久々五吟そ

友蛙池のまじ花を扱筆こそ
まじの葉やあつらふものか海草

欽
貞之

凡 夢

凡四や眼のちほろ大いれ月
西凡の波中より守乃吉道有
小使のあ上蓋——凡凡島
柳岸の大海蛙もむき利花子あ
ゆあひる露たき——る若菜

貞之
欽
水寄
貞之
松新

夕顔

雪隠の夕顔さきよ紙燭哉

一烟

あゝ花やえあゝのるゝ夕影

一俵

凝海草

水晶鮓や志さゝの浦に松風
雪や氷うらうすの 笑

一捆 糒

沖鮓

沖鮓陸より浪の夢酢哉
かゝ那や神の浪こす沖鮓

一袋 湖舟

鮓

鮓桶や雲力を夢に初貯る
味ひの鮓やハおをたけし那
玲鹿川うろくもの地也茶屋鮓
肉さわや古泉の鮓の雀鮓

一捆 不案 山氷 友鶴

出丁

黒衣出丁はあつて

かゝ事れをこゝろの山書な出拂
ねもながてねをまけし浦舟

一袋 幸通

雜夏

つもかきや佐原のわすれ無き目
竹切や所魂をうへ満山

柳紫
夏之

山萩

人形も罪なくてあふれ萩川
水も月夜をたへて古閑又たう

因元
一畑



